

明治・大正・昭和

めまぐるしく情勢が変化した近代日本において、国家元首、そして終戦後は国の象徴として、さまざまな公務にあたった天皇と、それを支えた皇后。皇居三の丸尚蔵館が収蔵する天皇皇后の身近にあった品々とともに3つの時代―明治・大正・昭和―をたどります。



明治天皇
(1852-1912)

昭憲皇太后
(1849-1914)



掌でいつくしむ
めいろう
瑪瑙の金魚
金魚 明治時代(20世紀)

明治の洋装事始め
ブローチ 20世紀初頭

明治時代 (1868-1912)

日本は、この時代に西洋文化を受容して、近代国家の基盤を整えていきました。その結果、生活様式の西洋化が進み、皇室をはじめ多くの日本人が世界のなかで活躍していくことになりました。

実用性と装飾性を兼ね備えた鉛筆

金製ケース付き鉛筆
エバーハート・ファーパー社 19～20世紀



大正時代 (1912-1926)

明治以来の政治体制がゆらぎはじめ、「大正デモクラシー」と呼ばれる新しい思想運動が広がりました。皇室では公的な場面に留まらず、日常の生活でも西洋スタイルが浸透しました。

大正天皇
(1879-1926)

鑑賞ガイド

開館記念展「皇室のみやび―受け継ぐ美―」第2期

| 令和6年 | 1月4日(木)～3月3日(日)

前期：1月4日(木)～2月4日(日) 後期：2月6日(火)～3月3日(日)

近代皇室を彩る技と美



このガイドは、「近代皇室を彩る技と美」展の

作品や展示テーマについて、わかりやすく解説したものです。

ご自身の鑑賞スタイルに合わせて、さまざまな使い方ができます。

鑑賞前 ▼ あらかじめ展示内容や構成を知ることができます。

鑑賞中 ▼ ガイドを読みながら展示を見て回することで、展示をより深く理解することができます。

鑑賞後 ▼ 展示の振り返りに使うことができます。本展小冊子(受付で販売中)と合わせてのご利用もおすすめです。

本展の内容をもっと詳しく知りたい方

▶当館開催の展覧会図録をご覧ください。

「明治の宮中デザイン―和洋の融和の美を求めて」宮内庁三の丸尚蔵館編、宮内庁、2003年
「祝美―大正期皇室御慶事の品々」宮内庁三の丸尚蔵館編、宮内庁、2007年
「幻の室内装飾―明治宮殿の再現を試みる」宮内庁三の丸尚蔵館編、宮内庁、2011年
「明治の御慶事―皇室の近代事始めとその歩み」宮内庁書陵部・宮内庁三の丸尚蔵館編、宮内庁、2018年
「大礼―慶祝のかたち」宮内庁三の丸尚蔵館編、宮内庁、2019年

表紙作品：七宝唐花文花盛器 壽川惣助 明治22年(1889)頃
裏表紙作品：猿置物 高村光雲 大正12年(1923)

開館記念展「皇室のみやび―受け継ぐ美―」第2期 近代皇室を彩る技と美 鑑賞ガイド
編集・発行：皇居三の丸尚蔵館 デザイン：中島文彦 印刷：株式会社アイワード



上記の二次元コードからも
閲覧可能です。

※著作権の都合により、一部画像を
掲載していない箇所があります。

The Museum of the Imperial Collections,
Sannomaru Shozokan
皇居三の丸尚蔵館

第一章

天皇皇后ゆかりの品々



昭和天皇
(1901-1989)



香淳皇后
(1903-2000)



サウジアラビア国王の贈り物
ネックレス 1971年頃

昭和時代 (1926-1989)

度重なる戦争で日本の産業は壊滅的な打撃を受けました。しかし戦後、日本が国際社会に復帰し、高度経済成長をむかえると、ヒト・モノの移動が活発化し、皇室と世界各国との交流はますます盛んになりました。



竜頭を菊花形に仕立てた特注品
枕時計 服部時計店 昭和40年代



ていめい
貞明皇后
(1884-1951)

爽やかな水色が映える
モダンな日傘
日傘 20世紀 [前期展示]



明治宮殿

明治宮殿は、明治21年(1888)に旧江戸城西の丸、現在の皇居宮殿のある場所に建てられました。天皇の御所であり、皇室が関わる国の重要な行事が行われる場所で、翌年2月11日には大日本帝国憲法発布式が執り行われました。しかし、昭和20年(1945)5月の空襲による飛び火を受けて焼失したため、もうかつての姿を見ることはできません。建てられた時代にちなみ、現在は明治宮殿と呼ばれています。



正殿外観



正殿内観

外観は、それまで天皇の住まいであった京都御所を思わせる和風建築、内部は椅子やシャンデリアを配した洋風のしつらえとする和洋折衷の建物でした。写真をはじめとする残された資料により、豪華絢爛な壁張裂(クロス)など、建築装飾そのものに美術工芸の粋が尽くされたことが明らかになっています。

室内を飾った美術工芸品

宮殿内の各室には、当時一流の作家らによる技巧を凝らした美術工芸品が飾られていました。これらの装飾品は、部屋の大きさや用途に合わせて作られていることが特徴です。



鳳凰の間。その名称にちなみ、鳳凰を表した作品が飾られていました。



鳳凰高彫花盛器 香川勝廣
明治38年(1905)

① 千種の間

豊明殿での饗宴の後の休憩で使用した建物。織物により様々な草花を表した格天井、木影の芭蕉をはめ込んだ欄間など、明治宮殿で最も華やかな空間でした。



七宝唐花文花盛器 澁川惣助 明治22年(1889)頃



七宝藍地花鳥園花瓶 七宝会社 明治22年(1889)

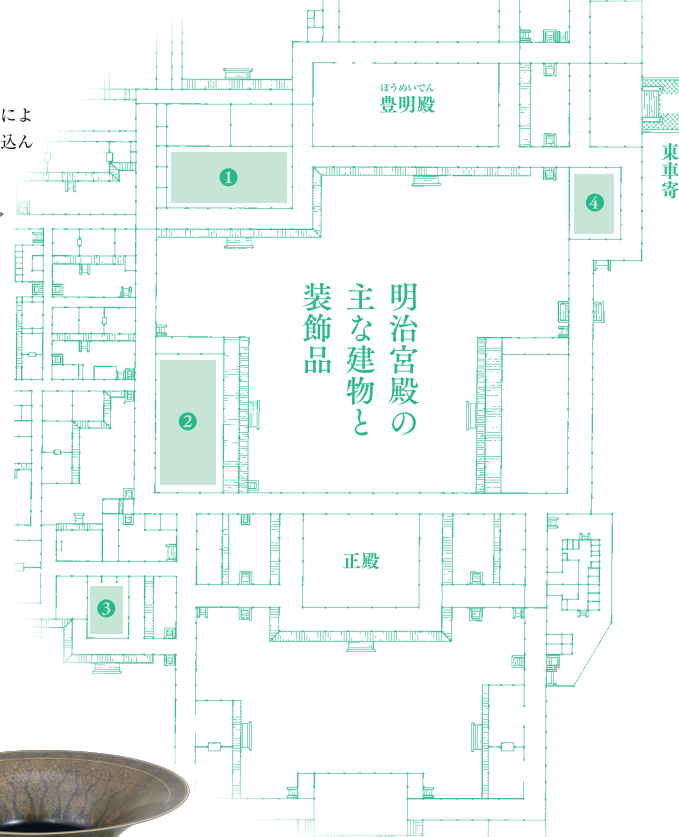
② 西溜の間

明治宮殿に参集した人々の控えの間として使用された建物。壁面には巨大な緞錦の壁掛が掛けられました。



唐花唐草文象嵌花盛器
金沢銅器会社 明治24年(1891)

明治宮殿の 主な建物と 装飾品



③ 鳳凰の間

天皇の謁見をはじめ、歌会始、講書始など宮中の伝統儀式が行われました。《鳳凰高彫花盛器》のほか、海野勝琅の《蘭陵王置物》が飾られました。

唐花唐草文象嵌花盛器
金沢銅器会社 明治24年(1891)

重要文化財 蘭陵王置物 海野勝琅 明治23年(1890)



昭和度 悠紀地方風俗歌屏風(左隻)
川合玉堂 昭和3年(1928)

〔後期展示〕

④ 南溜の間

明治宮殿の東側にある東車寄から参観した人が、到着した際や退出する際に休憩した部屋です。



色絵金彩菊貼付香炉
十二代沈壽官 明治26年(1893)



第二章 皇室の慶祝と宮殿を彩った調度

明治以降、宮殿では宮廷の行事や式典が盛大に行われました。そして、皇室のさまざまなお祝いごとで宮殿内を飾るために、当時の有名な芸術家、とくに帝室技芸員たちによって、多くの品々が制作され献上されました。ここではそうした作品を通じて、皇室のお祝いごとと明治宮殿の装飾について見ていきます。

明治天皇と昭憲皇太后の大婚25年(銀婚式)

明治27年(1894)3月9日、東京市内の各所で、明治天皇と昭憲皇太后の大婚25年を祝う催しが行われました。街中ではさまざまな出し物や装飾が人々の目を楽しませたほか、著名な作家によるお祝いの品が制作されました。なかには、銀婚式にちなんで、銀箔をあしらった掛軸なども献上されました。



大婚二十五年奉祝景況図(部分)
高橋源吉 明治27年(1894)



旭日双鶴松竹梅図 荒木寛畝・野口小嶺 明治27年(1894)〔後期展示〕



表装

大正天皇と貞明皇后の大婚25年

大正14年(1925)5月10日、大正天皇と貞明皇后は大婚25年をむかえました。しかし、体調を崩していた大正天皇は祝典などには出席せず、お祭りムードというわけにはいかなかったようです。それでも、明治のときと同様に、一流の作家たちによる絵画や工芸品がお祝いとして制作されました。



智仁勇 山元春挙
大正14年(1925)〔前期展示〕

新たな時代の平和と豊作を祈る

新天皇が即位したときに行われる一世一代の儀式のひとつに、大嘗祭があります。この儀式では国や国民の安寧と五穀豊穡を祈念し、その年に収穫された穀物などが神にささげられます。その後には、多くの人々を招いて大饗の儀という華やかな宴が開かれ、このとき、儀式で用いられた穀物を収穫した地方の名所を詠んだ和歌と、それを絵にした屏風が披露されます。

昭和3年(1928)の大饗の儀で飾られた屏風。悠紀地方(大嘗祭で捧げる穀物を収穫する地方)に選ばれた滋賀県の風景が描かれています。